中山間地域発
「新たな学び」
Sign Post Book

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

長野県教育委員会学びの改革支援課

中山間地域 新たな学び 創造事業　平成30年４月～

中山間地域 新たな学び 創造事業

1. 研究内容
2. 環境と体制
3. 研究計画
4. カリマネの取組
5. 実　践
6. 県下への拡がり

異学年合同の学びへ

- 学び合い，考えを深める授業の推進
- プロジェクト型の学習形態の推進
- 教職員が連携するカリキュラムの開発

自律した個の学びへ

- 自律した学習を促す学習環境づくり
- 「学びたい」を実現する授業の模索

遠隔合同の学びへ

- Zoomを用いた授業での連携
- ICT活用に特化した授業を実践

新たな学びのその先へ

ねらいと構成

　長野県でも児童生徒数が減り続けている現実があります。これは中山間地域だけのことではありません。今後，少ない人数での有効な学習スタイルが求められるようになると考えらます。
　県内の中山間地域にある学校では，規模が小さいことによる「少人数」や「限られた教職員」を強みに変え，「子どもたちの視点を大切にした学習」や「教職員全員で考え，全員で実践する取組」が行われています。
　長野県教育委員会学びの改革支援課が現場の先生方・有識者と取り組んだ「中山間地域の新たな学びの創造事業」では，中山間地域の小規模校からリーディング校を指定し，コーディネート教員を配置しました。コーディネート教員は，中山間地域の特徴を踏まえて，少人数のよさを生かし，子どもたちと共に新たな学びを開発しました。
　実践を持ち寄る「開発チーム会議」では，「ツール」より「マインド」を優先し，「学習者のための学び」について議論してきました。
　「異学年合同の学び」「自律した個の学び」「遠隔合同の学び」という視点で，開発したカリキュラムと実践が整理されています。有識者の皆さんのページや全国へき地教育研究大会長野大会の実践，中学校の実践も含めてご覧いただければと思います。
　この冊子のタイトル（Sign Post＝道しるべ）のように，「新たな学び」の参考にして頂ければ幸いです。

学びの改革支援課長　　佐倉　俊
義務教育課学校支援幹　中村　康則

1st

□　幸せな子ども時代と新たな学び　P 1-1～
（学校法人軽井沢風越学園
理事長　本城慎之介氏）

□　学習環境を子どもとつくることから学校が変わる　P 1-7～
（学校法人軽井沢風越学園
校長・園長　岩瀬直樹氏）

2nd

□　リーディング校の取組
（1）飯田市立上村小学校　事例①②＋
（2）木曽町立三岳小学校　事例③④＋
（3）栄村立栄小学校　事例⑤⑥⑦＋
年間計画

3rd

□　自律的に学ぶことを楽しみ，未知の世界と出会う　P 3-1～
（信州大学学術研究院教育学系
教授　伏木久始氏）

□　できないことをできるに，マイナスをプラスに　P3-8～
（信州大学学術研究院教育学系
教授　村松浩幸氏）

4th

□　全国へき地教育研究大会
長野大会
・10校の実践報告より
事例①～⑫

資料

□　中学校
・合同教科会
・テスト学習プリント
・ICT遠隔合同授業
・テスト共有ネットワーク　資料：事例①～④

1st

□　幸せな子ども時代と新たな学び
（学校法人軽井沢風越学園　理事長　本城慎之介氏）　P 1-1～

□　学習環境を子どもとつくることから学校が変わる
（学校法人軽井沢風越学園　校長・園長　岩瀬直樹氏）　P 1-7～

幸せな子ども時代と新たな学び

本城 慎之介
学校法人軽井沢風越学園 理事長

■幸せになってほしい

日々たくさんの子どもたちと，そしてかつて子どもだった人たちと関わりながら生きている。子どもたちと元・子どもたちの様々な表情や感情に出会いながら，私が願うことはシンプルだ。幸せになってほしい。そして共に生きる人の幸せも願ってほしい。このシンプルな願いが学校づくりに取り組む私のベースとなっている。「学校づくり」と書いたが，「幸せな子ども時代をつくるには…？」という問いに取り組んでいるという表現の方が適切だ。ただ，「はい，これが幸せな子ども時代だよ。」と，その方法や環境を子どもたちに差し出すつもりはない。そのつくり手は，大人だけではない。 子ども自身も幸せな子ども時代のつくり手だ。私たち大人は，つくり手であろうとする子どもの邪魔をしてはいけない。

平成30年度からの2年間の「中山間地域新たな学び創造事業」でも，自分たちの学びを自分たちでつくろうとする信州の子どもたちの姿があった。私たちは，その姿から多くの刺激を受け，新たな学びをさらに創造していく思いを強くした。そしてその思いは，私自身がこの10年ほどの間に，信州の自然の中で出会った子どもたちの姿から受けたそれと重なる。

私が出会った子どもたちの姿のいくつかを紹介しながら，幸せな子ども時代と新たな学びについて，思いを巡らしてみたい。

■焦げた手袋事件

北海道の雄大な自然の中で生まれ育った私が，東京での我が子の子育てに疑問を持つのは当然の流れだった。豊かな自然があり，東京への移動にも便利なところが気に入り，軽井沢町への移住を検討し始めたのは2005年頃のことだ。同時に，世界で活躍するようなエリートを育てるために全寮制中高一貫校を設立するという計画も進めていた。自分の子育てのためにも，そして全寮制中高一貫校を設立するためにも，軽井沢町という場所は最適だろうと思っていた。

引っ越し前に，我が子たちが通う幼稚園や保育園をいくつか見学した。“焦げた手袋事件”と呼んでいる衝撃的な出来事は，その見学先のひとつである「森のようちえん」で起こった。「森のようちえん」は，野外での生活を中心にした幼児教育のひとつで全国に広がっている。長野県でも，2015年から「信州型自然保育認定制度」がスタートし普及に取り組んでいる。

「軽井沢町内にあるキャンプ場と周辺の森を拠点にし，晴天時はもちろん，雨でも雪でも基本的には野外で活動する。最近耳にすることも多くなった“森のようちえん”や“野外保育”と呼ばれているスタイル」というような事前情報を頭に入れながらその「森のようちえん」を訪れたのは，2009年1月。一面雪景色，氷点下15℃前後の気温。「今日はさすがに屋内中心で過ごすのだろうな」と思っていたのだが，しっかりと防寒具を身にまとった子どもたちはずっと外遊びを続け，おむつ替え以外は屋内に入らなかった。倒木をロケットに見立ててのごっこ遊び。雪の中に腰をおろしてのおままごと。厳寒の軽井沢の森の中で豊かに遊ぶ子どもたちの姿。その光景に感心しながら，我が子にもこういう経験をしてもらいたいと思いながらゆったりとした気分で見学していた。

それはランチタイムに起こった。厳寒の中でもランチは野外。焚き火を囲んで焼きおにぎりや手にもって食べられるおかずを立ったまま食べていた。少し遅れて2歳児のミチヒサくんが，雪で濡れた手袋を外し，それを乾かそうと焚き火の周りにある石の上に置いた。どう見ても手袋の火が移りそうな位置関係。その場にいたスタッフもミチヒサくんの行動に気が付いているのだが，誰も何も声をかけない。スタッフが何もしないことを怪訝に思っていると，案の定，手袋は焦げてしまいミチヒサくんは泣き出してしまった。「やっぱり焦げちゃいましたね。」とスタッフに声をかけると，「そうですね。でもね，ミチヒサくん，先週は燃やしちゃったんですよ。」とだけ答え，彼を抱きかかえた。

その瞬間，頭をガツンと叩かれたような衝撃を受けた。2回とも失敗だ，手袋はダメになっている。でも，前回の失敗の経験から，火との距離感がつかめてきて，燃やすから焦がすに変わったミチヒサくん。きっと次は焦がさずに乾かせるだろう。そして前回は手袋が燃えるまで見守り，今日は焦げるまで見守ったスタッフ。安心して何度も失敗できる環境，関わりがここにはしっかり存在している。こうやってたくさん挑戦でき，たくさん失敗できる安心感がある場では，子どもたちが主体的に学ぶことができる。失敗がたっぷりと許容される場では，「わたしはわたしでいい。わたしはここにいていいんだ。」という自尊感情が豊かに育まれ，他の人の自尊感情も認め合う関係性を深めることができるにちがいない。ここはなんて豊かな場なのだろう。そんな思いを強くしたと同時に，“エリートを育てるための全寮制中高一貫校設立”のベースにある私自身の教育観が大きく揺らいだ。

それまでの私の教育観は，リンゴの栽培に例えるならば，同じような形，同じような色，同じような甘さのリンゴを6年間でたくさん育てる，そういったものだった。目に見える地面から上の部分だけに関心が偏っていた。この“焦げた手袋事件”で，目に見えない地面の下の根の部分の大切さに気がついた。どんなに強い風が吹いても大雨が降っても倒れないように，しっかりと地中に根を広く深くはること。何度も挑戦し，何度も失敗したとしても揺るぎない自分自身を持つこと。そしてそれが許容され受容される安心した場と関係づくり。それが，1人1人の子どもの幸せにつながると確信した。

台風の時に倒木することが多いと思われているカラマツであるが，これは植林時の“根切り”という作業が影響しているようだ。台風で倒木したカラマツを調査したところ，地面に対して水平方向に伸びる側根は

あったが，垂直に伸びる直根が見当たらなかったそうだ。（参考　2018年10月25日 信濃毎日新聞）。植林されるカラマツは，作業効率を上げるために直根を“根切り”される。そのため重心が高く，強風で倒れて（根返りして）しまったのではないかという見立てである。

私は，幼児期・学童期はまずは直根を自分自身にしっかりと深く根ざすような体験の積み重ねが大切だと考えている。安易に側根を伸ばさなくていい。深く太く伸びた直根からは，やがてしっかりと広く側根が伸びていく。幸せな子ども時代と新たな学びは，そこから始まっていくのではないだろうか。

■「うまく転べるようになりますように。」

そんな事件から数か月後。私はその「森のようちえん」のスタッフとなり，森の中で子どもたちと日々過ごし，保育の実践を積み重ねていった。刻一刻と変化する森で，たくさんの生命と仲間と出会い，子どもたちはじっくり，ゆったり，たっぷり遊び，そして学んでいた。そうしながら，1人ひとりがそれぞれのペースで少しずつ大きくなっていく。そんな毎日だった。

その「森のようちえん」では，誕生日のお祝いに「つもりのプレゼント」を贈り物にしていた。 どこにも売ってない，その子にぴったりなものを想像して，誕生日のその子に一人ひとりから手渡す。 手渡す子どもの手にも，受け取る子どもの手にも，何もない。けれども，そっと手渡したり，重そうに受け取ったりする。目には見えないけれども，その小さな手の中には，たしかに何かが鮮明に創造されているのだった。

その日，6歳の誕生日だったのは忍者ごっこが好きなルカくん。「月まで届く星の手裏剣です。月まで届くと願いごとが叶います。」とリヨちゃんはルカくんに贈り物を手渡した。うれしそうに受け取ったルカくんに「どんな願い事をする？」と質問してみた。すると，ルカくんはちょっと照れながら言った。「うまく転べるようになりますように。」 そう，ルカくんはよく転んでいた。派手に転ぶ。痛くて泣く。手に持っていた大切なものが壊れて泣く。悔しくて泣く。それにも関わらず，そんな彼の願いは，「転ばなくなりませんように」ではなかったのだ。

転ぶということを避けない。でも，大きな怪我にならないようにうまく転べるようになりたい。これは学びに向かう大切な姿勢だ。

「転びませんように。」そんなふうに願うのは大人の側だ。子どもとの関わりの中で，ついつい先回りをしてしまうことがある。失敗しないように，スムーズに進むように，そういった大人としての思いが行動として全面に現れる。転ばないことを目標にする。転ばない方法を指導する。転ばないようなところを走るよう伝える。転ばない環境を整える。転びそうになったら抱きかかえる。そういった大人の姿勢からは新しい学びは生まれない。これからの時代は，子どもに学びの主導権をしっかりと手渡す必要がある。そうすることで，子どもたちは，自ら主体的に意欲的に学び，幸せな子ども時代を自分の手でつくっていくのだ。

■過不足なく関わる

「森のようちえん」では，切り株が大活躍する。椅子や机になり，何かの目印にもなり，遊び道具にもなる。ある時，体験入園に来た3歳の男の子が，切り株に乗ろうとしていた。普段は切り株に乗るような体験をしていない様子だった。日常ではあまり目にすることのない切り株がゴロゴロあるのを見て，乗りたくなったのだろう。たくさんある切り株の中から，ひとつを選び登ろうとし始めた。

彼が登ろうとした切り株は，彼の膝よりも高い切り株だった。大人でも自分の膝よりも高いところに足をかけるのは難しい。しかも切り株だから，ぐらぐらと不安定だ。その子もどうやら難しそうだということはなんとなく感じ始めているようだった。それでも，なんとかしようとしていた。何度も片方の足をかけてはやめ，また足をかける。その様子を少し離れた所で見ながら，片足がかけられたとしても，もう片方の足を地面から離した瞬間に，きっと切り株はグラっと倒れて，彼は転び泣いてしまうだろうなと思っていた。でも，周囲の状況からすると，大きな怪我にはならなさそう。私はそう判断し，そのまま彼の様子を離れたところから見続けていた。

何度も挑戦した後，彼はその切り株に登るのに区切りをつけた。そして，すぐそばにあった 半分くらいの高さの安定した切り株を見つけて，その上にすっと登った。「登れたぞ!」という満足そうな表情で切り株の上に静かに立っていた。どんな景色が見えたのだろうか。1人で登れたからこその景色が見えているはずだ。

自分で切り株を選び，挑戦する。諦めることを自分で決め，次の挑戦の場を選ぶ。そして，1人で満足する。こういう子どもの姿に出会った時，“過不足なく関わる”ということの難しさと大切さを感じる。切り株に登ろうとしている彼への大人としての私の関わり方は様々な選択肢があった。「危ないよ。もう少し大きくなってからね。」と声をかけて制止する。「転んじゃいそうだから，こっちの切り株の方がいいんじゃない?」と提案する。手をつないだり，抱っこしたりして，その切り株に登らせてあげる。半分の高さの切り株に登れた時に「登れたねー，すごいねー」と駆け寄って声をかける。これらの関わりは，どれも私には“関わり過ぎ”のように感じ，私はただ少し離れた所で静かにその様子を見守っていた。しかし，もし彼がそれによって怪我をしたならば，私の関わりは“足りてない”ということになるだろう。

学んでいる子ども，学ぼうとしている子どもへの関わりは難しい。“過不足なく関わる”ということがキーワードになるということは理解しているつもりだ。しかし，実際にそれを実践しようとなるととても難しい。一人一人の子どもを日々よく観察することが基本となる。そして一緒の場にいる他の大人同士が意識を共有し，その子への関わりについて，ふりかえったり確認し合ったりすること，それを保護者の方とも分かち合うことも必要だろう。

過不足なく関わるということが，どういうことなのか。どうすれば実現できるのか。私は，まだ自信を持ってその答えを提示できる状況ではない。新しい学びを実現するためには，大人も学び続けていくことが大切なのだ。

■挑戦し続ける

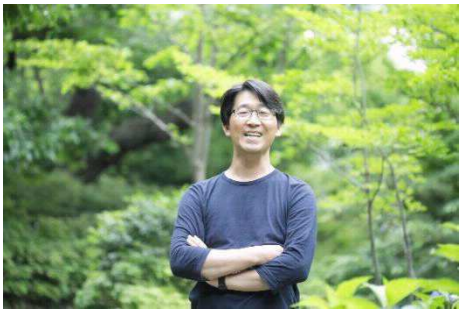
私は，仲間と共に，そしてたくさんの方に支えてもらいながら，2020年4月に軽井沢風越学園を開校する。地域に根差し，社会に開かれた幼小中混在校。そこでは，3歳から15歳の子どもがじっくり，ゆったり，たっぷり，まざって遊び学ぶ。

幸せな子ども時代をつくるための新たな学びは，どのように実現できるのか？ その学びは，どのように広げていくことができるのか？ そのような問いを立てながら，日々試行錯誤し，実践を積み重ねていく。私たちが学んだことは，長野県をはじめ全国に積極的に発信していきたい。同時に私たちもたくさんの現場に足を運び，実践者と出会い，切磋琢磨を繰り返していきたい。

「新たな学び」を実現するための挑戦は，まだスタートしたばかりだ。長野県の中山間地域で取り組まれた数々の挑戦が，今後さらに深化・進化し，広がっていくことだろう。それと同時に，一人ひとりの子どもたちが幸せに子ども時代を過ごせるようになることを願っている。この挑戦はまだまだ続く…。

本城 慎之介（ほんじょう しんのすけ）

1972年，北海道生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。大学院在学中の1997年に三木谷浩史氏と共に楽天株式会社を創業し，取締役副社長を務める。2002年に退任後，株式会社音別を設立し，「教育」をテーマに活動を始める。横浜市立東山田中学校長や学校法人東京女学館理事を歴任するなど，現場と経営の両方に軸足を置き活動した。2009年より軽井沢町で野外保育の運営と保育に携わる。2016年12月に一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団を設立し理事長就任。2019年10月に学校法人軽井沢風越学園設立，理事長就任。2018年10月から軽井沢町教育委員も務めている。2009年より軽井沢町在住。



2018年サマースクール「本物の写真家になろう」での小学校2年生の作品

学習環境を子どもと
つくることから学校が変わる

岩瀬 直樹
学校法人軽井沢風越学園 校長・園長

■わたしたちの未来をわたしたちでつくる冒険

学校教育が希望を持って語られなくなっている。ブラックな職場，ブラック校則，いじめ，教員を目指す人の減少，等々。学校は本来，人が成長していく，どんな子も幸せな子ども時代を過ごす場，自分（たち）の成長を実感する場。そんな場が楽しくないわけがない。世の中で一番希望を持って語られるべき場であるはずだ。

私たちは公立学校の可能性を信じている。しかし，同時に公立学校は変わっていく必要があるとも考えている。これからの社会を創っていく子どもたちにとって，教室での経験は「20年後の社会」のありようにつながっている。主体的に学校や自身の学びをつくる経験は，主体的に社会に参画しようというマインドを育て，「言われた通りにする」経験を積み重ねれば，受動的で消費的なマインドを育てるだろう。

自分の人生をデザインしつくっていく主体性・創造力は前者でしか育たない。

では，誰がそんな学校をつくるのか。教員だけが頑張ってもそんな学校はできない。4月開校予定の軽井沢風越学園では，「子どもも大人も，つくり手である」と考えている。

軽井沢風越学園は，子どもも大人も「つくる」経験を，じっくり，ゆったり，たっぷり，まざって積み重ねていきます。

本気で手間をかけて「つくる」ことに没頭し，ときには不安や不安定さを味わいながら「つくる」ことに挑戦していきます。

私たちは子どもこそがつくり手であることを信じています。

ここでいう「つくる」は物理的なものや学習の成果物だけにとどまりません。安全・安心な場を自分たちでつくる，学びをつくる，自分たちの学校をつくる，コミュニティをつくる，仕組みをつくる，ルールをつくる，自分をつくる。つまり，「わたし(たち)の未来をわたし(たち)でつくる」冒険をするのです。

子どもたち，スタッフ，保護者，地域の方々など，軽井沢風越学園では誰もがつくり手です。

「つくる」ことを通じて，「自由に生きる」ということと「自由を相互に承認する」ということを繰り返し試していきます。そうすることで，一人ひとりが幸せになり，幸せな社会をつくっていくのです。

これはなにも軽井沢風越学園だけのことではなく，全ての学校に言えることだ。

よりよい学校は自分たちでつくっていくもの。つくっていくためのコントローラーは私たちの手元にある。「よりよい学校とはどのような学校か」を探究し続け，自分たちでつくっていく。そのプロセスで，「自分が行動すれば自分を取り囲む環境は変わるのだ」と実感する。その経験は，ひいては社会に対する効力感につながり，主体的に社会をつくっていく市民を育てていく。

学校が変わっていく鍵はここにある。では具体的な小さな第一歩はどこだろうか。まずは自分たちの学習環境を自分たちでつくる，からスタートしてみたい。

■学習環境をとらえなおす

日本の学校建築の多くは，同じ形の教室が廊下に沿って一直線に並んでいる，いわゆる片廊下型校舎である。そのような教室の形式は「他に対して閉鎖的であり，この中では1人の教師によってクラスメンバー全員が「一斉進度学習」によって主導されることが学校教育の基調となる」といわれるように，現在の一般的な教室環境が，教師主導の一斉授業を強化してしまっているとも考えられる。

全国的には，70年代からオープンプラン・スクールをはじめとした子どもたちの学びやすさに焦点を当てた学校建築は増えたが，先進的な学習環境も当事者にとって「与えられた環境」になってしまい十分に機能していない所が多いときく。東京学芸大学教職大学院准教授 渡辺貴裕氏は，「その空間に込められた思想を教師たちが活かそうとしなければ，新たな学校建築上の試みは役に立たず，かえって「他と違っていて不便な施設」と認識される可能性がある。実際，教室の横に配置された，子どもが数名，中に入ってくつろいだりできることを意図された「アルコーブ」と呼ばれる小さな空間が，教師たちに単なる物置として使われ，子どもが寄りつかな

くなってしまっているといった例が，学校建築の「先進校」とされる学校においてさえ見られることもある。設備があっても，教師たちにその空間を活かそうとする構えがなければ，その設備は活かされない。」と指摘しているが，残念ながら，ハードとしての学校建築を変えたからといって，ただちに子どもたちの学びに変化が起きるわけではない。大切なことは，空間の意味と価値を踏まえ実践を変えていこうとする意識や継続的な取組だ。ただ学校建築を一から検討できるチャンスはそうあるものではない。

澤本(1996)が「教室といえばようかん型の校舎に同じ長方形の教室が長廊下の片側に並ぶ現行方式しか思い浮かべられない教師は，その枠の中でしか授業を考えられない。木陰の読書，屋上での合唱や詩の暗唱，廊下に机を出した一人学び，廊下コーナーのパソコンコーナーやミニ美術館等々，頭を切りかえれば，いろいろなアイデアがわいてくる」というように，従来の学校建築の枠の中でも，その空間の活用の仕方次第で，様々な可能性が広がっていくはずだ。

■教室リフォームプロジェクト

見方・考え方を変えれば，実は一般的な教室にも多くの利点がある。自由に移動できる机と椅子，余計な壁や柱がないすっきりした部屋……見方を変えれば，自由度の高いフレキシブルな学習空間と見ることもできる。

私が小学校で担任をしていたころ「教室リフォームプロジェクト」を行ってきた。

学習の当事者である子どもたちが主体的に参画して，「どうすれば居心地のよい空間になるか」「どうすれば学びやすい環境になるか」のアイデアを出し合い，協働で教室環境をつくっていくのである。先に澤本(1996)が指摘していることを学習者と共に試行錯誤する営みだ。

プロジェクトで重要なのは，
①教師だけでなく学習者自身が「こうしたい」というアイデアを出すこと，
②子どもたちが実際に空間をデザインしてみること，
③まずプロトタイプ（試作品）を試し，不都合があれば改善を図ること。

この3点を大切にしながら，継続的に実践を重ねることによって，子どもたちは学びやすさや居心地のよさに敏感になり，「毎日過ごす教室の環境を，自分たちの手でリフォームし続けたい」というオーナーシップ（物事を自分事と捉え，主体的に取り組む姿勢）が育まれていく。

学習環境を教師が準備してあげる，のではなく，学びの主体であり教室のオーナーである子どもたちと一緒につくる。

机をアイランド（グループ）に固定することで，協同的な学びをクラスの中心とする。座り方ひとつで学び方が変わっていく。私は30歳の時に，アイランドで固定することで，自身の授業スタイルを変える縛りとなった。

共同を促しやすいので，異学年合同の学び，自律した個の学びに合った環境といえる。

畳を置いて図書コーナーを作る。畳は人が集う場を促す。本を読んだり，少人数で話し合ったり。教室を学習コーナーに分けることで，様々な学び方が同時に起きやすくなる。

キャンプ用の椅子は「クールダウンチェア」。感情が揺れた時はここに座ってクールダウンする。誰が使っても良い。ぬいぐるみを抱きながら座っている人は，みんなで気にしつつそっと見守る，をクラスのマナーにしていた。

子どもたちが自分たちで試行錯誤することが大事である。畳コーナーを窓際に寄せてみたこともあった。これは狭くてあまり活用されず，3週間余りで場所が変わることとなった。手が届くところに本があると，読書をする子は飛躍的に増える。

人が集うベンチを置いたことも。子どもたちと一緒にベンチを作り，朝の会や帰りの会，授業で，全員で集まって話す際のコーナーとして活用した。

集まる場所をつくると人は集まる。畳コーナーも同様だ。

こんな小さな工夫も大切。環境をより良くすることは自分たちの手元にあることを実感できる。

子どもたちの現状に応じて，やりたいこと，やれるところから小さく出発していくことが大切だ。

「やってあげる」から「自分でやってみる」へ。

教師が手を尽くすことで，子どもの主体性を奪っているかもしれないことに自覚的になりたい。

■エージェンシー

「教室リフォームプロジェクト」において身につけてほしいものは，ハウツーではなく考え方である。現状の空間をどうリデザインするかを，すべての当事者がともに考え試してみる。教室という小さな空間の改善から目覚めたオーナーシップは，やがてその他の環境，ひいては社会への当事者性と，自らの行動による改善可能性への確信へとつながっていくのではないだろうか。

それは，OECDが「OECD education 2030」の中で，これからの教育で重要なのは**エージェンシー（社会参画を通じて人々や物事，環境がより良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていく姿勢・態度）**だと言っているが，それは手元で子どもと共に学習環境を試行錯誤する，こんな一歩から地続きである。

教室環境をどうしたら子どもたちは使いやすいか，学びやすいかなあと考える時，エンドユーザーである子どもたちに，
「ねえ，どうすると使いやすくなる？」と相談して一緒に教室環境をつくっていく。意見が割れたら，「じゃあ，1週間ずつ試してみて，よかった方でいこう。」と一緒に実践研究する。教室環境を「**共同修正**」する。

例えば自律した個の学びのために学習予定や学習進度，振り返りを記入するワークシートも，
「試しにこんな形式にしてみたんだけど，使ってみていろいろ意見ください」と問う。
使っている本人ならではの建設的な修正案がたくさんもらえるはずだ。このようにワークシートも「**共同修正**」すると，圧倒的によくなっていくし，何より子どもたちが消費者から主体的な「つくり手」に変化していく。

一緒につくる。困ったら相談する。これが，学校の先生にとって（いや先生に限らず），最も重要なあり方だと私たちは考えている。
これを「共同修正」という言葉で定義したい。学校のあらゆることで，子どもたちと共同でよりよくしていく。本気で子供や保護者が参画する場をつくる。「共同修正」を学級の，学校の核に据えると腹を決める。それが民主主義の第一歩ではないかと思う。そして，それが自由の相互承認の感度を育む第一歩だ。

極端なことを言えば，研究授業においても，子どもたちに授業案を示して，「どう思う？」と相談したっていい。
「導入はもう少し時間とった方がいいんじゃない？ペアでの対話で3分は短い。1人しか話せない。」
「振り返りはノートよりジャーナルの方が書きやすい」
「全体での対話は，10分じゃ足りないよ」
「ホワイトボードに話合いのテーマ書いて出しておけば？」
「途中，見に来ている人に『～って私は思うんですけど，どう思いますか？』って聞いてみよう」
「そもそも，課題が簡単すぎるんじゃない？」
「参観者が見やすいように，教室のレイアウト変えた方が良いかも」
私が担任していた子たちは教員の指導案検討さながらの真剣さで授業案を共同修正した。

共同修正＝そのコミュニティのメンバーでよりよくし続けるプロセス

これが教室の文化になっていった頃，こんなことが起きた。ある朝のサークルタイム（朝の会）でのこと。ある議題で話合いが行き詰まり，困った司会(ファシリテーター)の子がいった　一言。
「どう進めていいかわからなくなったんだけど，どうしたらいいかな」

謙虚な問いかけの力。共同修正のあり方。この問いかけで話合いは深まっていった。メンバーのほとんどが「当事者」になっていったのだ。人には力がある。

■大人も変わり続ける

教職員も同様だ。例えば教職員全員が参画して，居心地がよく，働きやすい職員室を目指してリフォームに挑戦してみると，「与えられた職員室」から「自分たちの職員室」へと，意識が変化するかも知れない。「学習環境（職場環境）づくりに参画する」ことは，公教育を変えていく重要なアプローチの1つだ。

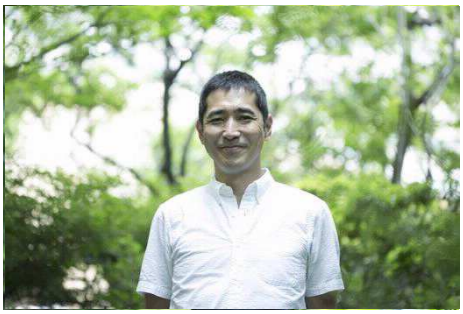
中山間地域の新たな学びプロジェクトでは，2年間にわたって，これまでの学校教育で当たり前になっていたことを問い直し，教職員が「つくり手」となって試行錯誤してきた。自律した個の学びも，異学年合同の学びも，遠隔合同の学びも，「今までの学び方を今まで通り続ける」ではなく，未知の新たな学び方を，教職員と子どもが共につくり手となって試行錯誤してきた。このプロジェクトには正解はないし，終わりもない。学習者と共に共同修正しながら，新たな学びを探究し続けるプロセスそのものなのだと思う。
大人が変わり続けることが，新たな学びを生み出すのだろう。

軽井沢風越学園では，関わる全ての人が「つくり手」となり，よりよい学校を目指し続けます。この学校での試行錯誤が，全ての学校がよりよく変化していくことの触媒となることを目指して地道に共同修正を重ねていきます。

学校が変わっていく方法は身近にたくさんあるはずです。
ともに変化していきましょう。

《引用・参考文献》
①上野淳『学校建築ルネサンス』鹿島出版会，2008年。
②澤本和子『学びをひらくレトリック』金子書房，1996年。
③岩瀬直樹ほか『子どもとつくる教室リフォーム』学陽書房，2017年。
④岩瀬直樹・吉田新一郎『シンプルな方法で学校は変わる 自分たちに合ったやり方を見つけて学校に変化を起こそう 』みくに出版，2019年（学校改革のヒントを網羅的にまとめてあります）

岩瀬 直樹（いわせ なおき）



1970年，北海道生まれ。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。埼玉県の公立小学校教諭として，4校で22年間勤め，学習者中心の授業・学級・学校づくりに取り組む。2015年に退職後，東京学芸大学大学院教育学研究科教育実践創成講座 准教授として就任。学級経営，カリキュラムデザイン等の授業を通じて，教員養成，現職教員の再教育に取り組んだ。2016年12月に一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団を設立し副理事長就任。2019年10月に学校法人軽井沢風越学園設立，校長・園長就任予定。日本教師教育学会所属。